

新山協ニュース

▲ 発行者 平田大六 ▲ 発行所 新潟県山岳協会
〒940 長岡市学校町1-12-23 室賀輝男方 TEL 0258-32-0428

92年度国体県予選

4月26日(日) 新発田市会場
(国体委員会案)

国体委員会では12月8日9時、関川村で委員会を開催し、92年度山形国体(10/4/9)の会場が小国町という至近地で有利、ということから今後の対策について協議した。原案は、1月19日の理事会に提案されるが、内容は次のとおり。

- ① 92年度の県予選会は4月26日とし会場は新発田市とする。
- ② 選手強化の意味あいから、早い時期に周知徹底をはかる。各山岳会、あるいは一般へのよびかけを早期に行なう。各山岳会では、選手候補になるような人材の発見にいまから注目しておいただきたい。
- ③ 予選会のPRを、市町村広報などにも願う。
- ④ 登攀競技用の人工岩場ポールの設置を県にはたらきかける。
- ⑤ 選手にも競技規則を渡して徹底させる。
- ⑥ 93年度北信越国体が新潟会場になるので、92年度の予

選会場も同一場所と考える。会議終了後、一行は午後から山形県小国町長者原の登攀会場(天然)を視察し、その後同町体育館で登攀練習用の人工ポードを見学し、小国町体育協会会長舟山寿一氏と懇談した。

(出席者) 森庄一、坂井厚、増子輝男、帯刀勤、杉本敏、苜部一雄、草間雄一、笠原嘉明、小林兼一郎、五十嵐篤雄、藤井信、平田大六、渡辺竜吉、横山征平

中国登山協会

との交流

中国青海省の登山協会筋から県山協にたいし友好交流の申出があり、この対応について、海外登山委員会の意向もとりのれ理事会で協議中である。

発端は、登山活動を通じ中国と交流を続けている長野県山岳協会(代表田村宣紀)が、本年中国西藏方面を登山し、

県山協の室賀会長、藤井副会長がそれに同行したことによる。

青海省では92年6月15日から一ヶ月間、コンロン登山祭を開催し、コンロン山脈東部の同省内の6千メートル以上の山岳20座を開放することにした。その祭の参加呼びかけと同時に、同省の登山協会と県山協の間で姉妹関係の交流を結びたい、という趣旨である。

県山協では理事会で検討中であるが、①海外登山委員会と検討してもらう。②中国の山に登りたい人は多いので、広く呼びかけてゆきたい。③コンロン祭は絶好のチャンス。④姉妹関係を結んだ場合の県山協の義務について認識しておく必要。などの基本的な考え方をまとめている。

また、この話をうけた窓口が藤井信副会長であるため、今後も副会長を通じて交渉してゆくこととするが、具体的な内容や特に前述の④などは重要であるので、引き続き青海省からの情報を待って、早ければ1月19日の理事会で決定される。

佐久間惇一氏

文部大臣表彰

(JAC 越後支部名誉会員)

県登山界の長老である佐久間惇一氏(下越山岳会所属)が、地域文化功労者として去る11月19日文部大臣表彰をうけられ、去る12月18日新発田市の山岳、民俗学関係者有志の主催で、近賀新発田市長など百名近い出席で盛大な祝賀会が開催された。

佐久間氏は多年にわたり山岳活動のかたわら民俗学の研究に精進され、多くの著作、市町村史の執筆にその業績を残された。こんなことくらいで表彰されては恐縮で昔から山に登っていたおかげ、とシヅ子夫人と並んでいねいに挨拶された。当日の出席者の山岳関係者は次の通り。

佐藤一栄、室賀輝男、五十嵐篤雄、望月力、本望英紀、杉原八百樹、坂井厚、平田大六、小林重弘、高橋正英、菅靖夫、山田一介、鹿島直江、金田保彦、上條力一郎、菊地マサ子、齊藤宣雄、中村一男、中村清、二瓶齊、藤井三郎、松尾賢二、松田光央、武藤たき江、渡辺宇一

第46回国民 体育大会報告

91年10月12日～16日

石川県白山山系

(選手)

成年男子 草間雄一 (監督)、

坂井厚、額田和人、片桐正

人

成年女子 高橋秀樹 (監督)、

後藤邦子、設楽なつ子、本

間雅美

少年女子 三条東高 渡辺正

之 (監督)、小出あかね、

佐藤真紀、今井尊子

(成績)

男女総合11位

女子総合9位

成男44位 (縦走39位、登攀

36位、踏査36位)

成女6位 (縦走9位、登攀

6位、踏査2位)

少女10位 (縦走13位、踏査

7位)

(役員出場)

安野正弘 (縦走T3主任審

判員)、苅部一雄 (同審判

員)、片桐一夫 (登攀審判

員)、森庄一 (踏査S1副

主任審判員)

(応援団)

五十嵐篤雄、室賀輝男、藤

井信、平田大六、田辺信行、
山田智子、稲田春男、帯刀

石川国体

支援募金報告

39名1団体20万5千円

10月12～16日行なわれた石

川国体に出場した選手及び応

援団にたいし支援をお願いし

たところ20万円を超える募金

が集まりました。支出、及び

募金者の芳名を報告してお礼

申し上げます。

(支出) 選手及び応援団へ17

万円、解団式へ2万円、委

員会 (12/8) 9千円、通

資格者会費の納入について

副会長

藤井

信

現在山岳協会が活動してい

る中で、資格を得て、安全登

山指導、技術の向上と統一、

自然保護活動と啓蒙等に携わ

って行く制度があります。こ

れらの資格者は、県山協の指

導員会の中に指導員、国体委

員会の中に山岳競技審判員、

自然保護委員会の中に自然公

園指導員・自然保護指導員と

して活躍されております。認

信等6千円

審判員の資格を得ることにな

(募金者芳名) 鈴木敏雄、片

桐一夫、小林重弘、平田大

六、杉本敏、坂井厚、五十

嵐篤雄、宿屋昭二、加藤記

代子、帯刀勤、望月力、金

子勝、半谷高紀、高橋一郎、

阿部信一、新潟山岳会、高

橋正英、田辺信行、田中純

夫、藤井洋、藤田明子、石

田国夫、北村猛、高橋秀樹、

草間雄一、土田幸雄、小野

健、山田智子、小関恒雄、

室賀輝男、落合武志、今成

幸夫、桑原悌治、東樹義夫、

佐藤一栄、三富一弥、藤井

信、築木力、小林由夫、七

沢恭四郎

指導員121名、山岳競技審

判員43名、自然公園指導員38

名、自然保護指導員67名です。

各委員会においては、技術

の研鑽、情報交換等の活動の

為に事務局を置き、その経費

として会費を徴収しております。

3委員会の会費徴収労

力を統一して、一つにすれば

労力経費の節約になるのでは

ないか。個人が資格を有した

のであるが、加盟団体の推薦

により受験の基礎資格が発生

したのであるから、加盟団体

ていただき、会費を徴収して

いただき一括納入してもらっ

てはどうか、等の議論を経て、

資格会費徴収事務局が誕生し

ました。3委員会においては、

今後業務活動に専念できるこ

とになります。平成3年度他

の会費・更新料の請求が先に

なり、システムの変更説明が

遅くなりましたが、上記の内

容による変更であること理解

いただきたいと思います。な

お会費専用口座は、

※銀行振込 〒940-121

長岡市大積町2丁目乙73

5甲 杉本敏方 新潟県山

岳協会宛 銀行口座 第四

銀行長岡市役所前支店 普

通口座1179492

※郵便振替 加入者名 新潟

県山岳協会 口座番号

新潟5112040

の2口座を開設しました。ま

だ未納の団体におかれまして

は、有資格者より会費を徴収

され納入願います。

今後はC級スポーツ指導員

の資格者が、平成3年度に当

協会からも誕生予定です。ま

た登録制度として、リーダー

バンク制度 (県体協) があり

ます。資格を得ることは、個

人の責任感の向上、技術研鑽

への努力心、登山活動の活性化、延いては団体の活性化につながっていくと思います。

環境にやさしい暮らしと

社会を求めて 6/8

―苗場山クリーン作戦から―

自然保護委員会
副委員長 桑原 悌治

山岳協では「環境にやさしい暮らしと社会を求めて」をスローガンに、6月8日約30名で、苗場神楽峰から和田小屋にかけて、登山道のクリーン作戦を実施した。

これは環境庁が推進する、「日本の環境20年と92年国連環境開発会議に向けて」をふまえた「環境月間」にこたえての行事であった。

梅雨に入った苗場の山塊は久しぶりの快晴で新緑がまばゆかった。当日は神楽峰に建つ「天下の霊観碑」再建の荷上げ作業も併せて行われ、参加者の皆さんには大変なご苦労をおかけした。

登山道にはところどころ残雪があり、芽ぶきの林間に明るい紫のヤシオツツジが一際めだっていた。三俣から神楽峰にかけてスキー場となり、登山道はこの中を縫うように、

参加者の皆さんほとんどに塩沢町役場、塩沢山岳会の皆りがとうございました。また、様に厚くお礼申し上げます。

平成3年度日山協海外委員総会

及び海外遭難対策研究会 参加報告 6/15/16

海外登山委員会
副委員長 田中 純夫

標記総会及び研究会が去る6月15・16日の2日間にわたって、富山県立山町千寿ヶ原の文部省登山研修所において開催された。東京と地方との隔年開催というサイクルはここ数年で確立したようである。今回は地元、富山県山岳連盟の皆様が大変お世話になったことをまず報告しておきたい。

日程第1日目は午後2時受付、3時から委員総会開始となった。まず始めに神崎忠男海外委員長より、海外委員会の運営、活動、会務報告というところで、平成2年度事業報告、平成3年度事業計画及び

会務報告が要領よくなされた。この中でとくに11月に予定されているAHTIJ自然保護東京国際会議については詳しい説明があり、参加への強い呼びかけがなされた。

続いて遭難対策研究会に移

夜の食事、懇親会は会場を称名荘に移して行なわれ、各地の民謡が披露されてなかなかにぎやかなものであった。

日程第2日目は、分科会と全体会とが行なわれた。テーマは「将来展望、日山協21世紀に向けて……」ということで、日山協と国体の関係、登山と競技との関係などについて自由な討論が活発に行なわれた。この中で、日山協はもともと山について純粋なものになるように体制を改める必要がある、という話など印象に残った。

以上昼まで全体会が行なわれて全日程が終了した。この日山協海外委員総会については、始めに書いたように東京と地方とで交互に開催しているのでもあつて、新潟県など全国的にみてかなりレベルの高い方面だなあと納得した次第である。面白いお話で終了後参加者から沢山の質問がなされていた。

文部省中高年安全登山講習会受講報告

7/10/12

中高年登山委員会
委員長 坂井 厚

近年の中高年の登山人口増と事故増に伴い、それに向けての安全登山が叫ばれている。去る7月10日から3日間、立山

7月10日、梅雨中休みの朝、新潟を筆頭に、15府県26名の参加数。山岳会関係6割、教委関係3割でした。山の経験は多種。年令は30才前半から、4年程下げた私まで多様でした。

開講式、所長からは事故増の為、日山協会長からは89・10真砂岳遭難事故を種に、安全楽しくをモットーにと話された。続いて、藤平JAC副会長は、温泉がある、酒が飲める等地上のドレスが山に入り、体力と老化を良く考えず、山へのこだわりと連れていつて貰えるという意識がある事。気象台職員による「山の天気」は、解り易いものでした。ラジオ放送の気象通報に、寒気団を付け加えて放送できるようにと要望しました。

室堂平へ移動し、班編成後曇空の下、雷鳥荘着。「各府県の中高年安全登山……」の資料を基に討議、長野(山総センター)からは、登山者、受入れ両面からの「中高年登山の実態調査」は興味があり、その今後の課題として、山登りの基本、ルール、マナーの啓蒙。グループの組織化とリーダー養成。山道の整備等と

中高年登山

中高年登山委員会

加藤 記代子

9/8

自然保護センターの開講式では、受講生を代表して修了証を受けた。

この受講山行では、小班編成が天候の故もあって良くなかった。また、別山の道迷

7月11日、夜半より梅雨前線による風雨強し。予報も同じで待期暫く後の出発。奥大日岳、剣御前はカットされた。雷鳥沢、剣御前小屋を経、別山、視界不良でルート判然とせず、急下降で北への道迷いとなり、別山から再び出直す。内蔵助山荘到着後は、前日に引き続き討議。生涯スポーツ、権利としていつでもどこでも参加できるような体制を。引率者の賠償責任保険。高年令者には人海が必要等話された。また、山荘主からは、真砂岳遭難について話された(天気予報無視、無統率、無決断)。

7月12日、大雨洪水注意報が出され雨強し。出発10分後の稜線は真砂岳、緩斜面に西風が強い。遭難現場で花束、線香を供え黙禱。死者の過を無駄にしないことを祈りながら……。雄山社務所で雨を避けての小休。地元の人であるうか3人程登ってくる。一ノ越山荘で集結、三箇所の緩な雪渓を横断、側溝の流れが激しい室堂平、そこには一般の観光客が、簡易な夏姿や雨衣で、強い雨足を気にして足早に歩を進めていた。

何事を行なうにも最初が要であるが故に我々の3人の役員(坂井厚、中村武雄)は何回も検討、打ち合わせを繰り返した。これでようやく本番を迎える段になった。晴天続きだったのに、よりによって15号台風の情報飛び込んできた。天気さえよければ80パーセントは自信があったのに無念。さあ我々3人とお願いしている役員に腕に全面成果がかげられた。

さあどうしますか。このたび室賀会長の(位)頼の趣旨によると「近年中高年登山が急増し、それに伴い遭難事故が増え、県教育委員会として、遭難事故防止対策を講じなければならぬこと」で依頼があった。これ以上腕を拱くことはできないので……。

いには、受講生の偵察がなされたらもっと良かったのではなかつたかと思つた。また、一般中高年登山者に対する諸注意点を拡げることの必要を充分に知ることができました。

というようなことで中高年登山委員会が発足された。名前だけということがいつの間にか役員になっていった。

さて、委員会として何をどのようにしてよいかを模索したが、どのような方が参加されるかわからないこと及び多くの方を引率した経験のあることから私が実行委員長の型で行なうことになった。

坂井委員長は、県教育庁の協力を、私は新潟市教育委員会の共賛の依頼に回ることから始まり、3人の総力を結集して計画が練り上げられた。

9月8日、平標山と計画した。当初は、一般市民1000名、楽山会50名を見込んで150名というところで計画したが、楽山会は会の行事と重なった

ことで数名の参加にすぎず、やむなく1000名で切った。15名程は断つたが、断りきれない方9名を含め109名の参加であった。

バス2台に106名を乗せて、3名は自家用車となった。役員は、講師2名、車長2名をバスに乗せ、その外はマイクロバスと自家用車2台で行くという汚点を残しての行動であった。

予算のないことでやむを得なかつたことだが、次回は善処したいと考えています。

参加者の3分の2は女性で平均年令52・3才と思われるが、40才前後から78才までであった。体力は、年令相応と思える方もおられたが、至って元気であった。指導力の如何によってある程度のカバーはできる。従って、能力のあるリーダーならこなせる。

役員は、全員で30名。6班に分け、L、SL1名ずつをつけた。講師は、2名、医1名、看護婦2名、その外無線、体調の悪い方の収容、コースL、ラストLの構成で役員を多くした。

何事もなければ多い役員であったが、初回であったが故

配慮をした。参加者の協力を期待するに懸念があったからなのおのことであつたが、病人怪我人が一人でも出るとむしろ少なくなつてしまう。

さて、要の「遭難事故防止対策」の教育から始まりです。

時間がないのでバスの中で指導する。堅苦しくなつてはいけない。趣旨を理解してもらわなければならぬ。しかし、あくまでも楽しくなければならぬことを講師に依頼した。さあ講師はどれだけ話術があり能力があるかです。

誰一人台風のことなど気に止めていない様子がない。あゝ講習は成功したなあと察する。登れないときには、三國小学校で「講習と親睦会」にきりかえる計画でいた。私は、

ひそかに、どんなに天候が悪くとも林道だけでも歩かせる予定でいた。運がよければ平標山の家までと。台風が早く来ても松手山である程度の風は防げることを計算した。何によりも、少々ぐらい条件が悪くとも歩かせることによつて納得し、不満が残らないことを経験から学んでいた。

各班のリーダー・サブリーダー

ダーにはメンバーの安全を第一に考え常に体調を把握しながら、行動食などのタイミング、歩行などの登山の基本を指導し、メンバーの絆、愛情を示し、欲張らない登山計画を教えるようお願いした。

考えてみれば、なんとまあ大変なことをいとも簡単に頼んだものである。私にとつてはL・S.Lを含めて全ての役員は、指導力のある方を頼んだからあたりまえのことであつた。よつて、依頼された皆さんもいとも簡単なことであつた。

なぜなら、あの台風の予報が伝えられている中、並雨の登りを参加者は、誰一人として「引き返そう」という方はおられず、安心してまかせておられる。

ある班は、地図の見方を習つていたり、植物の説明、歩き方、雨具の着るタイミング、行動食とまあまあ大した腕前であつた。

L・S.Lの若僧に従うも実力の示すところであろう。平標山の家では、並雨、風力2程度で、体をかがめていれば寒くはなかつた。あえて小屋使用をいわなかつた。予

算もなく、全員収容できないこともあつたが、何より、遭難防止という目的があるがゆえであつた。この状況の中、またとない機会で、体験を通して、どのように対処するかを学ぶことができる。

昼食時であつたからなおのこと、体で覚えることができ。また、メンバーが一緒に楽しい過し方を身につけることによつて、メンバーの絆もおのずから生まれる。そして無理に山頂へ行かなくとも楽しい一日の山行ができるということをお教えたのであつた。

常につき返す勇氣、メンバー全員で行動することの価値、重要性につながり、あの立山の痛ましい事故などはおこらなかつたのでは、と思ひます。各班それぞれに、Lの個性を出して、わきあいあいに昼食をとつた後、バスごとに記念撮影を行ない、引き返した。

参加者は、山行の不満もなさそうであつた。下山は難しいらしく、ギコチない足どりの方も見受けられたが、無事下山することができました。帰りは、室賀会長に替つて2号車へ乗車した。補助席に

座つた方の苦痛を心配したが寛大なお気持ちで笑顔で答えてくださったが、1号車は、そうはいかなかつたことを後日お聞きし、残念でありました。Lの一部に不満があつたらしく、指導能力とでもいうのでしようか、気配りがなかつたのであります。口を開けば、相手には小言に聞こえ、Lの言うことに耳をかたむけず、昼食もメンバーをまとめられなかつたようです。本人は優秀と思われており、登山経験は豊かでありませう。指導となると別問題であります。

以前からいつも思つておりましたが、指導委員会で、指導は、どうあるべきかを題材にしてもよいように思ひます。話は、それでしたが、そういう面もあつたことを報告することも義務と心得ますので記しました。心を痛めております。

2号車は、笑いが飛び、次の山行の要望が出るなど元気はつらつとしておりました。それでも帰宅後は、1号車の方も、礼状や、お礼の電話をいただき、嬉しい悲鳴が続き安堵することができ、ホツトしたことが本音です。

次回は、6月第2土、日曜日1泊2日、清水峠と決定しました。早や下歩きを行ない清水部落にお願い済みです。また、参加者の方の要望に答え、4月5日には、照葉樹林の角田山です。

行事計画を急いだことは、各山岳会の来年の計画が10月から行なわれることによるもので、これが当然と思ひます。行事を立案、計画、実行するにあたり思案とドキドキ、ハラハラの連続でありましたが、多くの方の力を結集することの強さをこのたびも感銘いたしました。

また、協力していただきました、映彩山岳会、越後ハイキングクラブ、新潟楽山会、むささび会の皆様に厚くお礼申し上げます。今後共暖いご協力をお願い申し上げます。

安全登山・公德登山

苗場山親睦登山に

参加して 10月5/6日

新潟鉄工山の会 石田邦雄
デランシネ山の会 高橋美子

「苗場山は越後第一の高山なり」で始まる「北越雪譜（鈴木牧之）」の一節が紹介の枕詞となる苗場山には十数年前に登ったのを最後に、すっかり足が遠のいていたが、鈴木牧之ゆかりの「天下の霊観」碑の再建を記念して、親睦登山（県山協主催）が10月5、6日に開催されたのを機に会社のOB、先輩等と共に参加させてもらった。

5日、15時30分、リゾートマンションの林立する湯沢ICで高速を降りる。R17の芝原トンネルを抜けて、清津川を渡った大島集落から舗装された林道を走ると、間もなくゲートがあり、ここで営林署の許可を得て5合目の和田小屋へ向かう。山懐奥に入るにつれて、周辺の樹木も色付きを増してきた。伐採されて裸地となったスキー場のゲレンデ脇の砂利道を登りきり、17時、瀟洒なスキーロッジに生まれ変わった和田小屋に到着した。昔の和田小屋を知る者に

朝食をすませると、各人出発の支度には忙しい。8時、ロッジ前から無雪期で地上高々と吊るされたリフトを2本乗り継いで、ブナ林からオオシラビソの針葉樹林帯に変わった標高約1800mの中ノ芝へ一気上がった。前方が開け、やっと開放された気分になる。黒土で滑る石コロ道から、二本並行して敷かれた木道を辿る。この周辺のドウダントツジの燃えるような紅が印象的だ。小松原登山道の分岐点から、神楽ガ峰の方にカーブすると、間もなく今回30年ぶりに再建されたという「天下の霊観」の碑に到着した。鬼に角標高2000mの山上での再建は、大変な難事業だったと聞いていたが、実に高さ3mもあると思われる八等身スタイルの細長い石碑に、碑文が刻まれた立派なものだった。一同が集結するのを待って記念撮影を行う。東側には平標などの谷川連峰が望めるが、稜線には雲がまとわり付いている。小休止の後、本峰へ向かう。神楽ガ峰から緩降する道を小走り下り、道中唯一の水場雷清水でのどを潤す。鞍部のお花畑付近で、ガスが



上って来視界が開ざされる。いよいよ最後の登りとなり、雷光形につけられた急坂を登る。途中どこかの大勢のパーティーとすれちがう。聞けば今朝、赤湯から来たという。突然前の方で、誰かが「あつ、ヒカリゴケがある」と言うのが聞こえた。暗々した岩穴の奥をのぞくと、確かに緑色に光っている。苗場山にもヒカリゴケがあるということは聞いていたが、初めて見る事が出来たのは収穫だった。10時30分、ポツカリと山頂湿原に飛び出した。間もなく後続のグループも集結、伊米神祠の前で乾杯し、時間の早い昼食となる。奥の苗場ヒュッテは、台風19号で屋根が大部分はがされる被害を受け、小屋じまいを目前に復旧工事に追われていた。

気温10度。ガスで視界悪い中、11時30分、支度の揃ったグループから下山を開始した。途中からは雨もポツポツ落ちはじめ、黄葉のブナ林の中を、滑る泥んこ道に足を取られながら和田小屋に戻り、久しぶりに秋山気分を満喫した。15時、全員の到着を確認し、五十嵐県山協名誉会長の閉会の挨拶で解散した。行事担当の方々、大変御苦労様でした。

第14回自然保護

指導員会研修会

10月19/20日

自然保護委員会 堀井 浩
副委員長

○10月19・20日、岩船郡朝日村にて開催。
○10月19日、朝日村猿田川野営場管理棟に集合、予定通り16時30分開会。
○記録映画「山に生かされた日々」を鑑賞。旧三面集落の人々の生活と文化、そして廃

村の記録に2時間30分が短く感じられ、会場は静かな中にも何かしら熱気がありました。その後座談会と懇親会に入ります。旧三面集落小池善茂、高橋源工門さんらの出席をいただき、会が非常に有意義な内容になりました。小池さんらは、現在も全国各地の開発に直面している地域から、参考意見を求められて出掛けておられるとの事。今もダムの建設は、やらないで済むならやっと思わずに無かったと思つて在るとの事。各自持参の地酒や、地元朝日山岳会差し入れのキノコ汁や鮭汁で夜遅くまで盛り上りました。

石川国体を終えて

成年女子監督 高橋 秀樹

発掘現場へ向かう。こちらでは各種の石器や球型の三面石等があちこちに見られたり、建物の柱跡もあり、初めて発掘現場を見た人達からは少なからぬ興奮が見られました。平田講師の名解説に遺跡見学も盛況のうちに終了、現地にて解散。

日々が続き、計10回、延べ日数15日、現地に通いました。大会当日は、トレーニングの成果が実ったのか、全種目1位になる事ができました。又、少女チームも大健闘をして、それぞれが石川国体への切符を手にしたのです。約半月後、石川国体へのトレーニングの再開です。一からやり直しのトレーニングです。山岳競技はそれぞれの大会に共通するものがあります。一つ一つの大会の為、独自のトレーニングが必要なのです。10月6日、計9回、延べ日数22日のトレーニング計画を全部終えました。最初来た時は、真夏のうだる様な暑さの中に、アブに追っかけられながら走っていたのに、今はもう肌寒く、山々も色づき始めていました。10月2日、石川国体の始まりです。この月の為に長い間精一杯トレーニングに励んできた選手達です。それぞれの胸中はどうなるものだろうかと思ひます。我が一戦ここには有り。開会式終了後、明日からの戦いに互いの健闘を祈り、成男・少女チームと固い握手をして別れました。よく日、登攀競技は激しい風雨の中で

○10月20日、前日からの雨も止まず予定変更。全員で旧三面集落のアチャ平遺跡の見学を行う事になり、一日の長でおられる平田理事長に講師をお願いし、出発前のレクチャーを受ける。

今年も又、成女チームの選手集めには大変苦労しました。3月頃から、あちこち電話でお願いしたり、説明や説得に回ったりしました。その後、多少入り替りもありましたが、県予選会の終る頃には、ほぼ目やすがつきました。又、成男チームは三条高校のOBから申し込みがあり、少年、少女も合わせて今年も北信越大会には全種別が参加できる事となったのです。5月中旬、成男チームと共に赤谷の杉滝岩でのトレーニングを始めとして、今年の国体がスタート

に着手と、よく日の1時頃にになります。少し仮眠の後トレーニングに入ります。今年初めて的人工ボードでの登攀会場でした。非常に指先の力が必要で、1回登るともうパ

行われました。悪天の為、スリップするチームが続出する中、私達は落ち着いた登りで6位と、順調なスタートを切りました。次の日は、ひさびさの時間が広がり縦走競技の始まりです。選手達も明るくスタートして行きました。しかし1人が体調を崩し、9位と大きく落ち込んでしまいました。私もガックリきて、選手達がゴールしても気持ちよく迎えてやれません。その晩は、沈痛なムードの中、最後の種目、踏査競技の打ち合わせが遅くまで続きました。今、入賞できるかどうかの瀬戸際にいる私達です。しかし踏査種目は私達の一番得意の種目であり、それなりに一番力を入れて練習してきたものです。重量の配分では各選手から遠慮の無い意見が飛び、明日への意気込みが感じられます。

○8時、各自の車にて出発。現地では、猿も出迎えてくれ雨も小降りとなる。

にわか考古学者多数出現、各自持論を持ち出してストーンサークル等の見学、古代の人々の生活に思いをはせる。その後、屋敷跡の縄文遺跡の

しました。北信越大会は長野の霧が峰が会場に決った為、私達には遠い会場になりました。片道6時間程の道のりです。前後、車で出発して現地

分の目標を決めていきます。又、地図に乗っていない道を書き込んだり、それぞれの道をつなげたりして自分達の地図を作っていきます。こんな

その後、屋敷跡の縄文遺跡の

す。前後、車で出発して現地

分の目標を決めていきます。又、地図に乗っていない道を書き込んだり、それぞれの道をつなげたりして自分達の地図を作っていきます。こんな

シャツ姿でスタートして行きました。県の団長が激励に來られ、選手が見えなくなる迄、見送って頂きました。この種目で2位と、大きく挽回した

選手達の喜びは大変なものでした。総合6位になり、待望の入賞を果たして石川国体が終りました。少女チームも踏査で7位に入り賞状を手にする事ができました。成男チームは44位とふるいませんでした。彼等の表情は明るく「最初はいやだったけど、国体に出てみて本当に良かったです。色んな人達と友達になりました。

事務局漫歩

総務委員会委員

杉本敏
(前 事務局長)

新潟県山岳協会に事務局長の役職が設けられたのは、昭和56年の事である。それまでは理事長が協会の事務を司り、事務所は協会長宅となっていた。当時、室賀協会長、鈴木理事長共仕事が多忙になり、協会として各団体との連絡に遅滞が起きては、協会の発展につながらない、とのことで協会長のお膝元から私が選出されたようである。

事業については、新潟県山岳協会と長野県山岳協会は関東ブロックになっていて、年1回の1都10県会議と国体地区予選も関東ブロックで、栃

た。「そんな言葉が私は本当に喜しかったです。だからこそ、勝っても負けても、それぞれの胸の内に万感の思いを込めて終る事ができるのでしよう。最後になりましたが、忙がしい中、応援に来てくれた山協の方々、協力頂いた大勢の皆様、心より御礼申し上げます。

木県宇都宮市古賀志山系で予選会が行われ、その後国体の競技化の移行に伴い、全国9ブロックに再編され、長野、新潟は北信越にはいった。当時北信越地区とのつながりは始まったばかりであり、関東地区の行事が年2回、後は県内行事で年月を過ごしていた。当初は会計の仕事もなく、協会ニュースも原稿が揃ったのを受け取り、印刷屋へ回して仕上げて発送する仕事は年2回から3回位不定期であり、事務局として仕事するよりは、会長、理事長が多忙な時手助けする役であった。

山岳協会が変貌させられる

状況になったのは国体である。オープン競技から天皇杯を争う得点種目に変更になったのが昭和55年、第35回栃木国体からである。国体のオープン競技を廃止して、総ての参加競技は得点種目として技と力を競いあう方針が日体協から打ち出され、日山協も昭和48年、第28回千葉国体において、7項目からなる得点配分案を発表して、競技化へのルール作りが敷かれて行ったのである。国体委員会が昭和51年新設されて、初代委員長に藤井信現副会長が就かれた。「山登りを点数で表す?」県内岳人は基より、全国でも異論が多数噴出してきた。山は競うものではない。安全に登るものだ。国体に関係しなくとも山は登れる、等々である。協力体制を組むより、山岳競技とは何か、を説明して巡る方が大変な時期であった。委員長は協会行事が有れば出席して、国体競技ルールの説明をし、また各地区毎に主だった人に集まってもらって説明会を実施した。競技ルールの普及に努めるよう協会長からの叱咤激励が飛ぶ中、ルールを協会予算で製本化しようと言う話になり、冊子300部印刷屋にお願いした。300円で売れば、競技ルールの普及とあわせて、委員会の資金にもなるとの皮算用であったが、競技理解者が少ない時期売れたのはたった1冊と記憶している。激動期の為毎年のようにルール改正が行われ、売れない本を積んでおいても理解者が増えないとのことで、予選会参加者に配布した。残部が無くなり「ホー」とする。その後ルールの問い合わせが有った。予選会参加チームの増加、役員のスミズミな予選会運営が生まれたのは、種が芽を出したな、と考えずにはいられなかった。

国体委員会としては、県下代表選手に環境の良い状態で全国大会に出場してもらいたいと願っているのだが、何分にも資金の無い委員会である。山岳協会は事前に現地を見、歩き、登ってこなければ勝負にならない種目である。代表選手を環境を良くしてやるうに、まだまだ他の種目と比して劣悪であり、選手に苦勞をかけているとおもう。もっと資金を使えることと、トレーニングできるゲレンデ、それも岩場の通年使用できるゲレンデが欲しいものと思おう。

先にも書いたが、会計は当初余りタッチしていなかったのであるが、それでも若干の流れは解っている。収入から考えたなら、支出がオーバーしているのは毎年の事のようにあった。だが新山協も公の団体である。年度当初の評議員会ではよく収支が合うものと感じさせられた。事務局の仕事をする前は補助事業の役務を4年努めた。これは外部団体からの寄付金を協会が執行した報告書を日山協に上げる委員会であった。奇特な団体が有ったから協会もまるく納まっていたのかも知れない。今なら自転車振興会、船舶振興会などの競技団体の活性化の為に努力されている。

自然保護委員会も最近は大所帯になってきた。社会的な自然保護運動の高まりの中で関心が高まってきたのか、それともあまりの山の汚れに岳人として立ち上がらなければならぬ状態になったのか解

らない。先輩は言った。俺は山へ行つて汚してこない。だから他人が捨てたゴミなど拾ってくるものか。山を愛する人が好きな山を汚すはずがない。感動の言葉であった。それでは今の山の汚さはどうしたことなのだろうか。あまりの交通の便の良さや休暇の増加で、にわかハイカーが増えてきたせいではないだろうか。山小屋も営利主義が主流を行くようになり、ゴミの出る商品を不便な山中で大量に売る。今の山は人が歩けばゴミが出るしかけになってきたようである。

昭和61年、中里村清津峡で第3回自然保護研修会が開催された。山岳協会の悪い所は、行事案内を出してもとんと返事が返ってこない事である。今回は県の自然保護担当者、中里村の観光課職員の参加も有ること、自然保護委員会も力を入れた。対外的な事も有るし、また例の如く当日になれば参加者が会場に現れるのではないか、と思ひ、委員会の事務局担当徳長副委員長は宿へ水増しして予約をした。申し込み締切が過ぎて

も参加希望はさっぱり増えない。電話攻勢を掛け、再度案内して出席を懇願する。やるべきことはやった。あとは当日を待つだけとなった。清津峡の岩の崩壊事故が発生し、立ち入り禁止問題が発生した時期である。地元観光課、県の環境保全課としては、深刻な問題として受け止めていたのである。ところが研修会が始まって出席者はさっぱり増えない。土曜日だから仕事が終わってから駆けつけてくるだろう、と受付はのんきに構えていたが、懇親会が始まる時刻になつてもやはり集合が悪い。宿の女将さんが心配して「大丈夫ですか」と声を掛けてきたのは担当者も顔が青くなつてきた次第である。結局県と中里村からの出席者の前に、2人前のお膳を並べて「今日はほとんどんやつてくさい」と挨拶した。その後自然保護に関しては、環境庁からの委嘱者だけでは少なすぎるので、日山協も指導員を委嘱することになった。県下に自然保護の啓蒙を促さなればと、徳長さんは1団体の1名以上の指導員を選出してほしいと、熱い勧誘の手紙を書き送り53名の指導員が新

現めに、女性の親睦登山を開催しました。当初は、100名以上の参加を数えました。この盛況を男性会員が見逃すはずがありません。保護者を自認して年々男性参加者が増えたことは、考えも及びませんでした。

指導員は協会の委員の中で、一番堅実な運営がなされていると思います。指導員の多さが健全な会の運営をもたらしれていると思います。

山岳県である新潟の団体を見渡しますと、地域活動をしながら趣味としての山行をやる団体が多いようです。地元の登山道整備、住民の登山活動の手助けや案内、また救助活動もやる。このような実績と冬の活動実績を考え合わせたら、まだまだ相当数の人が、指導員に手が届くところに位置されていると思います。今後各各位におかれましては、資格修得に努められ、自己の活動に自信を持って地域活動や団体活動、個人山行に励んでほしいと願っています。

遭難対策委員会において協会の救助隊が出動したのは、下越地区では飯豊連峰を中心に杉原八百樹氏、平田大六氏らの出動があった。新潟地区

では、現副会長で遭難対策委員長山田勲氏らの飯豊連峰で短大教授の捜索がある。県山協が五頭での国体予選会開催中、木六山での豪雨についての救出を、新潟地区の阿部信一氏を中心に行った。遭難は毎年30件前後県内で発生している。山岳遭難はこの内10件足らずであり、ほとんどが山菜事故である。組織の人間であれば、必ず山行届けを所属に提出するし、山麓でも提出して山へ入るはずである。所属会は、今日は会員がどここの山へ行っている。時間になつても帰ってこない。心配だから偵察隊を出すか。と手続が進められる。万が一の場合の救助隊も、基本的には所属の会で組織するのが山岳団体と思う。届けは事故責任、保険の關係も有るから提出の徹底をさらに望みたい。

この委員会から分離されるような形で、中高年登山委員会が平成2年より発足した。未組織中高年者に登山のルールを学んでもらい、1件でも遭難事故を減らし、皆さんから山を楽しんでもらいたいと協会では願っている。事故は起きてからの対応も大切だが、

起こさないよう初心者をかか
に教育するかは、組織として
もっとも力を注ぐべきである。
北信越国体の当初、3回ブ
ロック大会として5県が代表
の座をかけて開催された。試
行錯誤の大会運営も年々顔馴
染みができ、和気藹藹の中
も、各県の面子をかけて戦う
選手の成績に一喜一憂して大
会が過ぎていきます。役員は
大会の裏方になる人、表の方
で大会を運営する人に別れま
す。当然表は審判団になりま
す。各県より3名の審判員が
派遣されてきて競技運営がな
されます。裏側は、会場の準
備、用品の用意、宿泊、食事
等と大会運営に滞りが起こら
ないよう気を配るわけです。
当初は県体協の基での運営で
はなかったので、競技会場地
探し、開会式、閉会式、宿泊
場所等の折衝を、国体委員長
の指示の基、事務局も手伝い
をして巡りました。現在は関
係市町村の協力を得られるシ
ステムに変わってきています
ので、随分楽な設営になって
きたと思います。私は表の方
の経験が無いので、その苦労
は解りませんが、各県の代表
としてきている選手団を、公

平に審査する精神的負担は相
当なようです。長野の久保田
全さんが、審判長をやられた
翌年から、他の4県を巡って
審判員をやられた時「長野で
無事大会を開催させてもらっ
たお礼奉公ですよ」と言って
新潟で審判員をやって帰られ
た。設営の苦労の一端を知る
者としては感動の言葉であっ
た。

大会期間中選手が頑張っ
ている時に親睦会もままならず
思案の末生まれたのが北信越
協議会である。これはその年
の北信越国体の反省、本国体
の反省を各県より出してもら
って協議をし、翌年の北信越
国体の概要の発表がある。内
容が豊富で大事な会議になっ
ている。5県連名で山岳部門
の大会日程を1ヶ月早めて実
施の要望書を出したり、日山
協へ国体運営のあり方を要望
したり、抗議文を出し、改善
の軸になってきた。最近では
拡大する大会運営を、競技中
心に縮小する提案がなされて
おる。

山岳協会の事務局も国体中心
であり、年間の大半を国体の
事務処理に追われる。当協会
も今国体委員会のスタッフが
充実してきており、国体事務
局も安定した資金と人材を確
保して、委員会としてひとり
歩きをしようと懸命である。
地が固まれば良い成績を残す
はずである。優秀な選手候補
が大勢居る当県においては将
来が楽しみである。会員の今
以上の理解と協力を熱望しま
す。

協会は国体行事の他に、技
術修得を目的とした行事と、
親睦を目的とした行事がある。
どちらも最近参加者が減少傾
向にあるようだ。事務局の喜
びは、携わった行事に参加者
が多数有ることです。大勢の
協会員と山で逢いたいと思
います。

理事会報告

91年11月17日

長岡市けさじろ荘

- (出席) 室賀輝男、小林兼一郎、藤井信、望月力、五十嵐篤雄、田中純夫、片桐一夫、桑原悌司、田中栄弘、五十嵐昇、田辺信行、石田国夫、高

- 橋秀樹、坂井厚、堀井浩、杉本敏、山田智子、平田大六
- ① 石川国体報告
- ② 各委員会報告
- ③ 苗場山「天下の霊観」碑建設
- ④ 今後の行事予定
- ⑤ 中国登山協会との交流
- ⑥ 国体委員会、海外登山委員会への付記事項について

91年12月1日

長岡市中央公民館

- (出席) 室賀輝男、五十嵐篤雄、小林兼一郎、藤井信、平田大六、今成幸夫、山田智子、森庄一、北村猛、土田幸雄、桑原悌司、杉原八百樹、杉本敏、遠藤家之進正和、坂井厚、石田国夫、堀井浩、安野正弘、小野健、田中栄弘
- ① 中国登山協会との交流
- ② 国体委員会会議について

新年会案内

日時 92年1月19日(日)

12時開宴

場所 新潟市 イタリア軒

会費 8000円

申込 〒940 長岡市学校

町1-12-23 室賀輝男方

新潟県山岳協会 ☎025

8(32)0428 FAX

1754 他上下越連絡所

理事会開催案内
日時 92年1月19日(日)
10時30分～11時40分
場所 新潟市 イタリア軒
議題 ① 中国登山協会との交
流について
② 92年度国体参加方策

松平山清掃登山

松平山では、91年8月25日(日)、第2回目の松平山草刈りと清掃登山を実施した。会員65名が参加し、県民いこの森魚止めの滝登山口から入山し、松平山、五頭山を経て、清掃、ヤブ刈り、道路整備、12枚の案内板取付けなどを行った。(中村武雄)

登山用品専門店

信頼できるパートナー

大新スポーツ

新潟市東堀6 ☎(025)222-3736